

子どもに寄り添い、支援する！

～アメリカの児童福祉の現場から～

講師：てい子・与那覇・トゥーシーさん



★プロフィール★

名護出身。ニュージャージー州グロスター郡地域の児童青少年対象のカウンセラー、ニュージャージー州カンパニアランド郡立精神保健センターにて児童青少年対象のカウンセラー、ケースマネジャーなどを経て、2004年に定年。現在はニューヨーク沖縄県人会会長を務める。ニュージャージー州の三郡地域にてCAP（児童暴力防止プログラム）運動家としても勤務経験があり、1996年おきなわCAPセンター設立にあたっては、少なからぬ影響を与えた。

アメリカで臨床ケースマネージャーとして児童虐待やDVの被害者に関わってきた、てい子・与那覇・トゥーシーさん。たまたま沖縄に帰省するという情報をキャッチして講師をお願いしたところ、快く引き受けて下さり、11月5日、沖縄県男女共同参画センター・ているにて学習会を行いました。

てい子さんから、子どもの気持ちに寄り添うこと、支援や自己管理の方法、自己防衛機制について学びました。被害を受けた子どもも、ケアをする大人も、スポーツや音楽、芸術など好きなことをやる中で心理的な負担をやわらげる「昇華」することが必要で、それが『エンパワメント』につながる、と話されました。てい子さんの体験談を交えたお話は、わかりやすく（おもしろく）…あっという間の2時間で、さらに質疑応答も含めて3時間の長丁場となりました。

今回は、アメリカに戻られたてい子さんに、「講座を終えて」というテーマで寄稿していただきました。

～講座を終えて～

「SAFE, STRONG, FREE はCAP/ ICAPの登録標語で安心、自信、自由に生きる権利は誰にでもある」このスローガンはいつ耳にしても目にしても私には新鮮に感ずる。生きている限り、どんな些細な対人関係を通してそのスローガンの観念と実践応用をその度ごとに実感させられる。Strongを直訳の「強く」とせず、あえて意識、しかも比喩的に「自信」として、つまり自信をもつと心理的に強い生命力、使命感を抱き目的へ向かって行動していく…と勝手に解釈している。そして人間は目的を抱き動いていると輝く、ともいわれる。

実は、私の関わってきたクライアント（その頃の名称で、その後、消費者とも呼ばれていたが、今は単に青少年の名前で記されている）は必ずしも児童虐待やDVの被害者だけではなくたという事を注意書きとして追加したい。担当するケースの半分は平凡に波風のある家庭で、遺伝的なものなどか原因不明と診断された精神病、うつ、不安障害などと、多様できりがなかった。中には虐待やDVの背景の青少年でもちゃんと通学し対人関係も心配なく社会へ旅立つ者達も沢山みえた。2、3日でケースを閉め二度と危機状態に陥る事もなかった。周囲の大人がむしろ必要以上に騒いで一度だけ巻き込まれてしまった苦い経験もある。

自殺未遂や他の理由で入院する子どもは、如何なる診断を下されても必ず何らかの支援・援助を受けながら精神病院から退院する。大人も青少年も同じくサービスを受ける権利がある。それらの退院患者を家庭や学

校へ訪ねて行って面接をしながら患者の精神・心理状態を観察するのが私の仕事の一つだった。入退院をくり返す青少年を何回も観てきた。親や学校の受け皿体制に問題があったりもしたが、健康保険が切れたとか或いは保険会社から一週間以上は駄目だとかの制限でまだ妄想状態なのに退院させられたケースもあった。面接、電話、読む、記録、全て精神保健に関し、そういった環境の中で毎日仕事をしていると己の精神保健を管理することをたまに忘れてりするワーカーが少なくなかった。燃え尽き症候群である。私は燃え付き予防に定期的に武道修業をし、自分を防衛機制で「昇華」させ、今も続けている。

今回の講座の「子どもに寄り添い支援する」…誰にでも解るこのテーマの素晴らしさに感心する。なぜならこのテーマはいつも私が口にする概念、Empowerment (エンパワメント)の核心だからである。しかし、脳裏にあるのは子ども達、特に普通より以上に周囲からの精神的援助を必要とする対象の子ども達である。それで、その寄り添う大人、親、学校や塾の先生、特に Social Worker 達 がいかに自分の為の自己管理ができていくか、が問われる。或いは、真剣になって努力している姿が対象である子ども達に少しでも理解されているかどうか、であろう。私がここでいう自己管理とは飛行機の機内での乗組み員の非常時の説明、いざという場合に着用する救命胴衣に例えられる。親やワーカー達自身が自分の救命胴衣をちゃんと着用していないと子どもを助ける事は困難か不可能だろうと思うからである。

家から車で 25 分の所にある CAP/ICAPで 2ヵ年余り CAP スタッフとして一生懸命だった日々を思い出した。それは 24 年前の 1985 年の話である。その時の自分の心理状態、仕事ぶり、十代の子ども達3人を抱える母子家庭、貧困と心理的苦痛をウスマジン(塩水)飲む様な状況にいた時期に、大学生(心理学専攻)もしていた。その時の教授の 1 人が私をCAPに推薦した。CAPのスローガンから勉強して心理学への興味がよけい増してきた。様々な形で虐待された子たちを何人も通報はしたが、その後その子達がどんな待遇を受けたり治療を得たか、そしてどこに住むようになり、たち直らせる事ができたか…等と正直いってそれらの好奇心と懸念から、私の精神保健、特に児童青少年対象へのキャリアが始まった。それから気がつくと 20 年余りその道一筋に突進してきた。光陰矢の如しである。

(てい子与那覇・トゥーシー)



～参加者の感想より～

- 今日知識のエンパワメントを受けることができ、今後の生活に活かしていきたいと思いました。人にはそれぞれスタイルがあって、自分は自分で良いし、他者も他者のスタイルとして受け止める、見守ることが大切だと感じました。
- 生きている感性に出会えて良かったです。古き良き精神 (エンパワメント) を感じ、とても嬉しかったです。
- 今日一番の収穫は「tough love」です。「愛」という名のもとにやっている行為というのが、実は相手のためにならないというその考え方はすごく大切だなあと感じました。
- 私も (自分の子も含め) 子どもたちと関わっていく上で、自己管理や昇華することの大切さをあらためて感じました。まずは自分を大切にしよう。